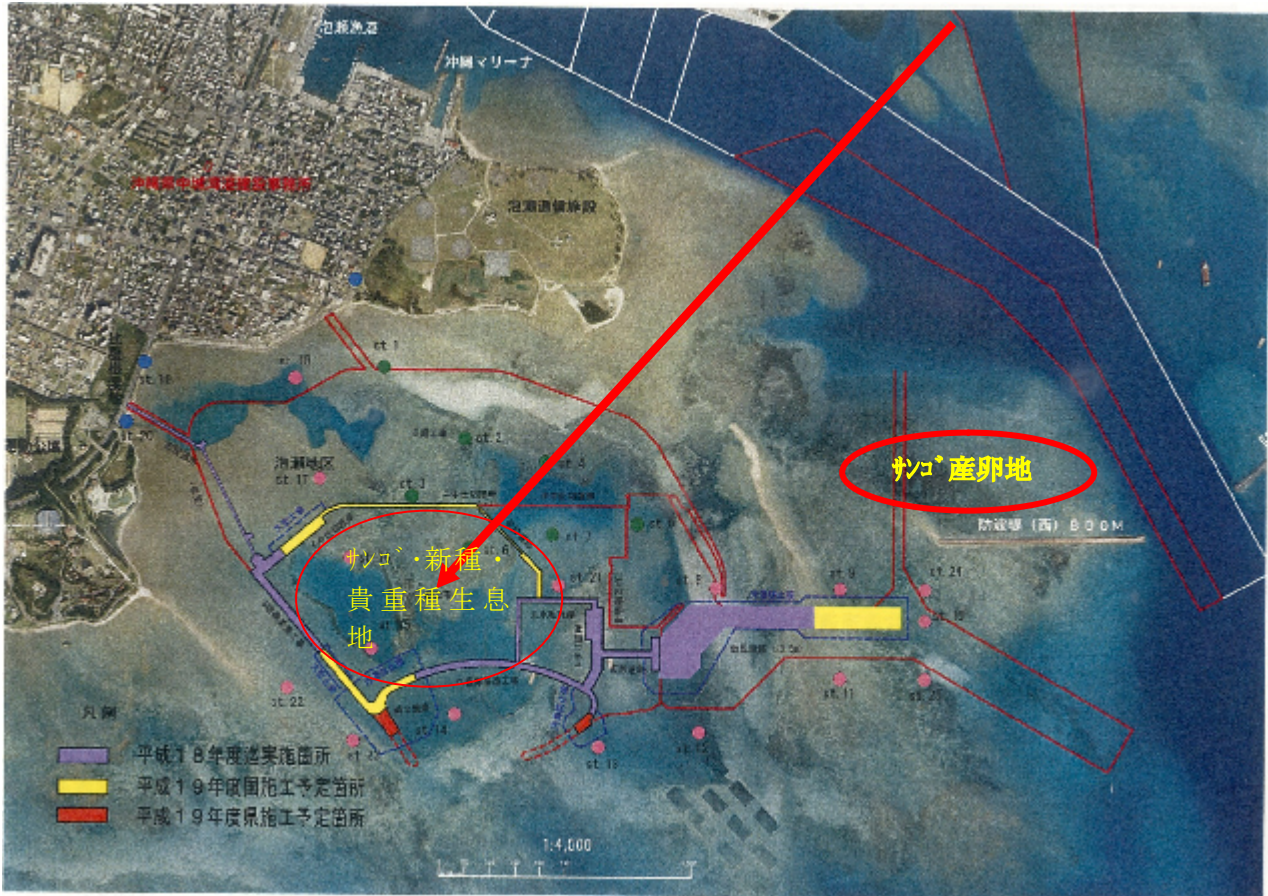


泡瀬干潟埋立の現状・問題点（概略）泡瀬干潟を守る連絡会 07年10月23日

泡瀬干潟・海域埋立事業は、沖縄県中部にある沖縄市の東にひろがる干潟・海域 187ha を埋立てる事業。下図（事業者資料、環境監視委員会配布）の赤い線で囲まれた部分。下が第一期工事(96ha)、上が第二期工事(91ha)、現在第一期工事が進行している。北側に米軍泡瀬通信施設がある。うすい紫色はこれまで終わった部分、黄色は平成19(07)年度工事部分（護岸工事と航路浚渫）。次年度以降、図の上にある新港地区（沖縄マリーナの右上、泡瀬埋立地から約4km離れている）の港・航路の浚渫土砂がポンプ浚渫・パイプ輸送で運ばれ埋立てられる（図の赤い矢印が運搬ルートを示す。）



この埋立は、沖縄市の強い要請で、国（総合事務局）・沖縄県の事業として埋立てられ、完了後、国から沖縄県が購入し、そのうち約半分 90ha を沖縄市が買取り、「海洋リゾート地」造りに活用される予定。事業の目的は二つ。一つは新港地区の港・航路の浚渫土砂処分場を造る事（国の目的）、二つは埋立地を活用して「海洋リゾート地」を造る事（沖縄市・県の目的）。

問題点

1. 二つの目的は崩壊し、埋立の合理性・緊急性がない。
新港地区 FTZ 構想の失敗・破綻。海洋リゾート地造りの実現性がない。市民・県民に大きな負担を押し付ける。新港地区の埋立は港・航路の浚渫土砂で埋められることになっていた。新たな米軍事基地提供（共同使用地）という問題もある。
2. アセスが杜撰である。（ケレミドリ移植、海草移植、トゲハゲ保全、貝類・鳥類・サゴ等生息する種の調査極めて不十分）
3. 埋立着工後も新種・貴重種・絶滅危惧種が数多く発見されている。それらの保全がなされていない。
新種約 9 種、絶滅危惧種 121 種（貝類 108 種、甲殻類 7 種、魚類 6 種）環境省絶滅危惧種貝 30 種
4. 無駄な公共事業の典型であり、世界に誇る場所、ラムサール条約登録湿地の条件を満たす干潟・海域が失われる。
5. 市民合意がなされていない。（様々なアンケート結果は埋立反対が過半数を越えている。）
6. 国内外から埋立中止要請がある（ラムサール条約事務局長、オーストラリア環境遺産大臣、日弁連など）
7. 埋立を強く要請した沖縄市の事情が大きく変わった。

06年4月の市長選で「埋立積極推進」の候補者が破れ、「情報公開、市民の意見を聞いて進める」と公約した東門市長が誕生。検討会議の意見書が出された（市の活性化ならず。事業の見直し）

事業着工後発見された新種・貴重種・絶滅危惧種（代表例4種）



ホソウミヒルモ（海草）



エンカジミ（スギホムシと共生）

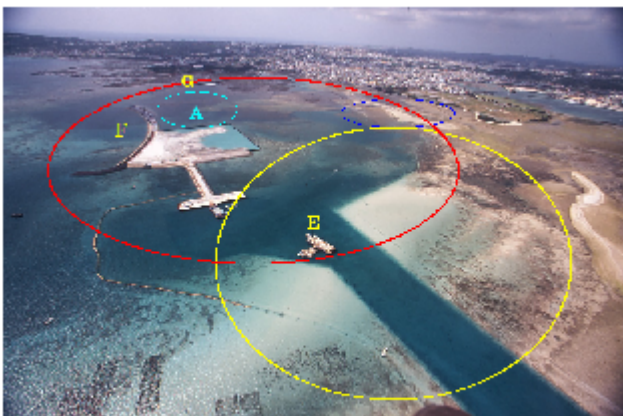


ガンナカガ（生息環境と貝・約7mm）



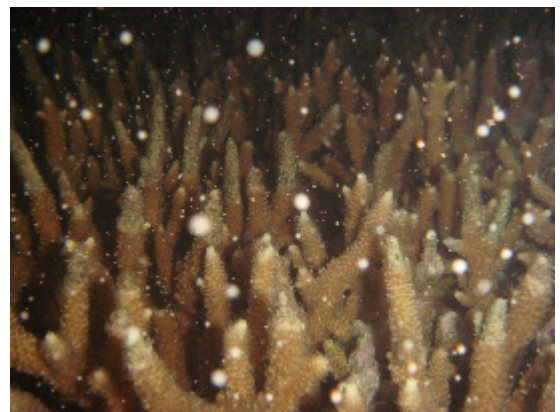
ヒメカガオサガニ(新聞記事)

海上埋立工事現场上空からの写真(左)とヒメツドリイシの産卵(右)



07年3月22日、小橋川共男撮影

赤い円は埋立区域、黄色の円はガンナカガ、ニライカゴウチ等生息地、青い円はヒメツドリイシ（絶滅危惧IA類）生息地、Aはスギホムシ、ホソウミヒルモ、ヒメカガオサガニ等生息地、Fは人工ビーチ護岸、Gは陸からの仮設橋梁先の護岸、Eは航路浚渫場所



アス書に記載されていなかったヒメツドリイシ（枝ヤコ）の群生地とそこで初めて確認されたヤコ産卵（放卵）

この場所は左の写真の右端の砂州のすぐ近くここも航路のため浚渫される。

最初の全体図の「ヤコ産卵地」の場所

07年6月8日、沖縄リーフエック研究会、安部

